



戸板康二 栗本 薫 笹沢左保 戸川幸夫 西村京太郎 結城昌治 田中光二 海渡英祐 夏樹静子 都筑道夫 和久峻三 宮原昭夫 石沢英太郎 生島治郎

K A P P A N O V E L S

現代ベストミステリー③

殺人貸借表

日本推理作家協会編

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしづきの点がありましたら、お教下さい。ご職業、ご年齢などもしそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

現代ベストミステリー③ 殺人貸借表

昭和55年11月1日 初版1刷発行

定価650円

編 者 日本推理作家協会

発行者 小林 武彦

印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613

© Association Mystery Writers of Japan 1980

(分)0-2-93(製)02414(出)2271 (0)

Printed in Japan

現代ベストミステリー③

さつ じん たい しゃく びょう
殺人貸借表

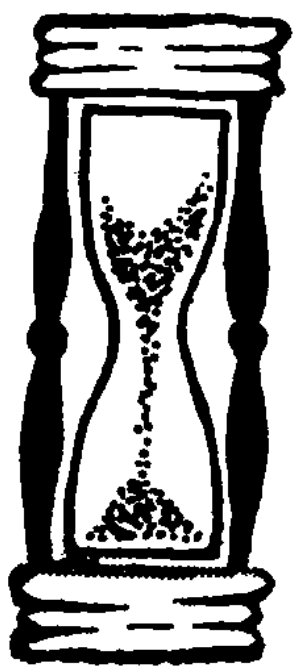
日本推理作家協会編



カッパ・ノベルス

現代ベストミステリー 第3巻

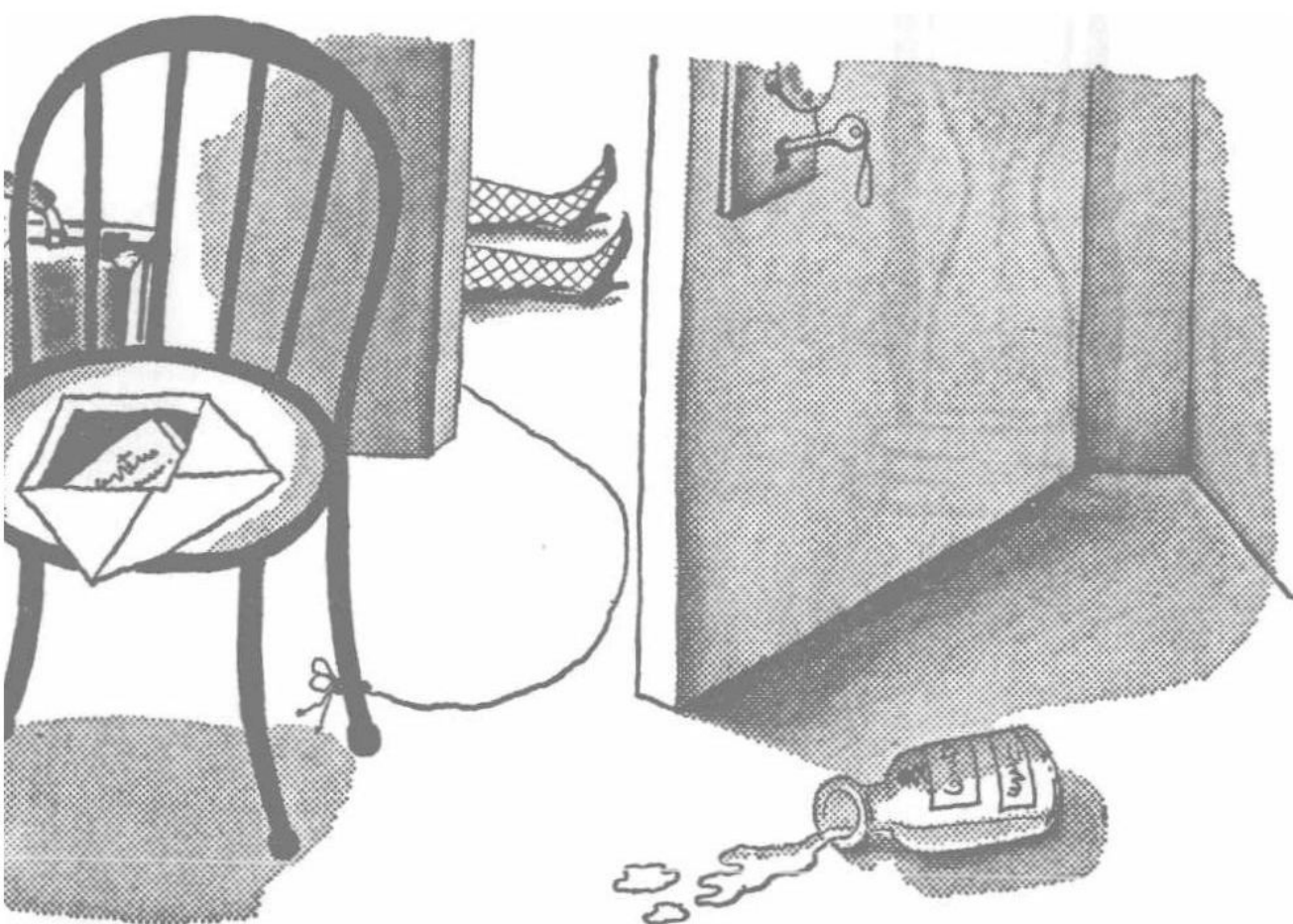
殺人貸借表



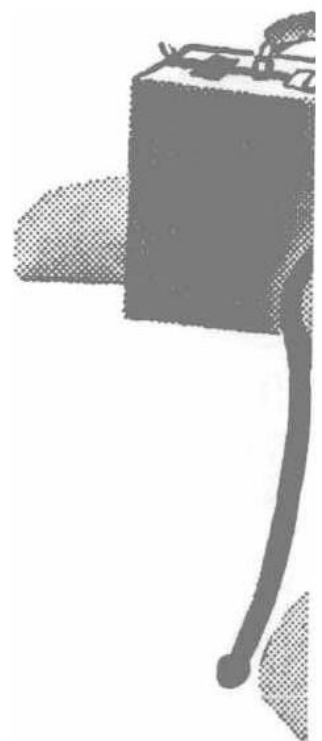
『殺人貸借表』

目次

戸板康二	栗本 薫	笹沢左保	戸川幸夫	西村京太郎	結城昌治	田中光二
先代の鏡台	ポップコーンを ほおぼって	記 憶	白眼 しろめ がどこかで 笑ってる	超速球 150キロの殺人	因果の車	凍った蜜月 みつげつ
7	28	52	65	86	108	128



海渡英祐	泥棒三重奏	155
夏樹静子	五千万円すった男	176
都筑道夫	くわえ煙草で 死にたい	199
和久峻三	異人館の遺言書	218
宮原昭夫	若葉照る	236
石沢英太郎	献本	271
生島治郎	密室演技	290
佐野洋	短編ミステリーの書き方	315



本文・扉カ
ット／川
村
麻
子

先代の鏡台

十一月に、東京と大阪の劇場で、歌舞伎俳優のほとんどが出演、「仮名手本忠臣蔵」を競演して、好劇家を喜ばせた。

興行会社は抜け目なく、「忠臣蔵」ツアーというのを企画し、往復の旅券とホテルの費用をうわのせして、大阪の中座の座席券を発売したりした。

私も、月の中ごろに、関西まで見に行ったが、今では四十代のなかばに達した一人の俳優が、なかなかいい芝居を見せているのに注目した。

この役者については、十五年ほど前に、ちょっといい話があるので、中村雅楽譚のひとつとして書いておく。ただし、当人が困る部分があると思うので、ここでは



(1915～)

戸板 康二

戸板 康二
といた やすじ

「雅楽シリーズ」は好調に書き続けられているし、劇評に随筆にと、近ごろの戸板作品の充実ぶりには瞠目させられるものがある。『ちよっという話』『新ちよっという話』でとりあげられている各界名士の幅の広さと、その逸話を短い文章の中で描写している文章力のすばらしさなど、正に独壇場であり、ベストセラーを続けているのも当然と首肯させられる。文章力にプラスするに、現代推理としての洒落な味わいに富む小説構成をもつ氏の推理小説には、ますます磨きがかかってきた。

中島宮松という仮名にして、書くことにしたい。

(一)

あれは昭和三十七年の秋であった。

歌舞伎座の千秋楽の翌日に、私が千駄ガ谷の家を訪ねると、老優雅楽の部屋に、客が来ていた。

玄関で私を迎えた門弟の楽三が、遠慮して「邪魔じゃないかしら」といっている私に、「かまいませんから、どうぞお上がり下さい。来ているのは、宮松さんで、さつきから、今月の役についてのダメ出しをしてもらっているんです」といった。

宮松は、その月、初役で「すしや」の弥助を演じた。父の先代宮松の当たり役を、大体、いえに伝わる型で見せたわけだ。

そのころは、私も毎月東都新聞に劇評を書いていたのでハッキリおぼえているが、当時三十にまだならない宮松の演技が、いかにも未熟だったので、「三位中将維盛の気品は見られるが、色気がないので、舞台がもりあがない」というふうな苦言に近い書き方をした。

雅楽も、そのころは今より元気で、こういう古典の大

曲に初めて出る俳優がいますと、みんなに明治以来の演出や、役のしどころを、囁んでふくめるように教えるのが楽しくて仕方がないという顔をしていたものだ。

その月は、梶原に出ている路延、母親になった嘉久之助も初役だったので、三人とも千駄ガ谷に話を聞きに行ったはずだが、ことに宮松は、その先代と親友で、子役の時にはいろいろな芝居で共演させているため、親身になつて、この「義経千本桜」三段目釣瓶ずしやの下男弥助じつは三位中将維盛という、色白のやさ男の役を、ていねいに指導したのだった。

雅楽の居る部屋の襖ごしに、かなりカン高い声が聞こえる。あまり、機嫌がよくなさそうであった。

きのうで終わった「すしや」のダメ（注文）を出しているというのを聞いて、私は、同じ演目を、京都の顔見世にでも持ってゆくのかと思ったが、じつは、そうではなかった。

あとで聞くと、昔の歌舞伎では、千秋楽の夜、稽古をし直すことが珍しくなかったそうだ。そのしきたりを学んで、雅楽は、興行の終わった翌日に、宮松を呼んで、役を教え直していたらしい。

「竹野さんがいらっしやいました」

低い声で楽三がいったが、鍛えられた声だから、すぐ聞こえたと見えて、話し声がハタとやんだ。

「竹野さん、どうぞ」と雅楽がいった。

襖をあけると、火鉢をへだてて、老優と、四十も年のちがう宮松がいた。宮松は机の上に、書きぬきを置いてある。赤い鉛筆で一杯書きこみがしてある。

「楽三、いま襖の向こうから、声をかけたのが、よくこちらに通ったよ」と雅楽がいった。

私が思ったのと同じことを、いつているのが、おもしろかった。

雅楽は、楽三を次に大変喜ばせた。

「十二月に明治座で忠臣蔵が出る。楽三に四段目の郷右衛門殿をやって貰うことにする」といったのだ。

注釈しないとわかるまいが、「仮名手本忠臣蔵」の四段目は、塩治判官の切腹する場面である。判官が真っ白な死に装束で座につくと、下手の襖のかげから、家来の声がする。原郷右衛門に呼びかけて、殿様の御生前に顔を拝したいという意味の歎願をする。それを聞いて郷右衛門が判官に小声で尋ねると、大星由良助が来るまではだめだという。

「スリヤ御対面はかないませぬか」と諸士の声がして、

郷右衛門が「いかにも」と返事をし、義太夫が「並み居る諸士は言葉もなく、ひと間ひっそ」と語って、ホロッとさせるところだ。

この「郷右衛門殿」と呼びかけるセリフが、近ごろどうもよくないと私は思っていたのだが、ちょうどその「忠臣蔵」に諸士の一人と六段目の獺人が出る楽三に、このセリフをいわせようと、雅楽が思いついたのは、名案にちがいなかった。

と同時に、雅楽が私にろくに会釈もせず、楽三にそんなことをいった気持ち、よくわかった。

雅楽は今まで、宮松に小言をいっていた。宮松の目を見ると、思いなしか、充血して、涙ぐんでいるようにも見えなくはない。

当然はいって行った竹野に対して、宮松には、きまりの悪い思いがある。それを雅楽は救うつもりで、いきなり「忠臣蔵」の話をしたのだ。

雅楽という人には、こういう心配りがいつもある。そこが、私は、たまらなく好きなのである。

宮松が、あらためて、私に頭をさげた。

「いま、おじさんに、弥助の話を、もう一度伺っているところでした」

「いやね、竹野さん。宮松の弥助は、あなたも書いていたが、いかにも色気がたりなかった。この役は、維盛だという性根^{しょうね}を別にして、何よりもまず、すしやのひとり娘のお里と毎日いちゃいちゃしているという、つつこばらしいところがほしい。岡（鬼太郎）さんがいつか書いていたが、早くいえば、女たらしのとてもない若僧だが、それはとにかく、お里との色事をタツプリ楽しんでる様子が、姿にも動きにも出ていなければ、役としては、不充分です。宮松のお父さんは、こんな役をしていると、自然な色気がただよって、じつによかった。棧敷^{さじき}や平土間^{ひらどま}にいる娘たちが、みんなお里みたいな心持ちになって、溜息^{ためいき}をついたもんだ」

雅楽がこんなふうに私に向かっていう言葉を、姿勢を正して聞きながら、宮松は素直に一々うなずいていた。

「お父さんは、もっとも、かなり遊んだ人らしいからね」と私がいった。

「そう、それを私もいおうと思っていた。私も同様、若いころは、しじゅう一緒に遊んだものだ。お互いに、かみさんには時折り苦い顔をされたり、皮肉をいわれたりしたが、それでも、言い訳ではない、その遊びが舞台に出る時の役に立った」

雅楽がそういいながら、遠くを見るような目つきをしたのは、先代の中島宮松と楽しい時間を持った青春時代の回想が浮かんだからであろう。

この宮松を生んだのは、先代の二度目の妻女で、たしか柳橋から出ていた人のはずだった。

「戦後の歌舞伎の人たちは、花柳界にゆかないんですよ」と私がいった。

「そうですね、私なんか、ほとんど、どこも知りません。お客様に招かれた席で、新橋や赤坂の芸者衆と会うこともあります。が、たいてい父とおつきあいのあった、お婆さんたちですから、話が合わないんですよ」宮松は、やわらかな話になったので、すこしは気が楽になったと見えて、こんなふうに、話した。

「お婆さんたちというが、どの土地にだって、若い子も、いるんだぜ」

「ところが、おじさん。若い芸者衆は、私たちを相手にしてくれません。第一、みんな、芝居を見に来ないんです。話はゴルフ、映画、テレビです。いつか、こんなことがありました。新喜楽で証券会社の日比野さんに御馳走になっていた時、ちょうど話が、その月に私がさせていただいていた桜丸のことになりました。すると、そば

にいた若いひとが、目をかがやかして、桜丸なら知っているわというんです。私は私の舞台を見てくれたのだと思って、そうですか、桜丸いかがでしたという、あいに海が荒れたので酔ってしまったのというんです」と宮松がいった。

「何の話か、竹野さん、わかるかね」

頭の回転の早い雅楽にも、唐突^{とうとつ}すぎると見えて、首をひねっている。私には、むしろ、わからなかった。

「日比野さんが、海が荒れたって、何の話だといわれますと、ケロツとして、その子がいいましたよ」

「何だって」

「大島に行く汽船でしょう？」

三人で吹き出した。

「これだからね」としばらく経って、雅楽がいった。

「これだから、むずかしい。若い役者が年相応の芸者と遊ぼうとしても、向こうが芝居に興味を持たないんじや、仕方がない」

「先代のころは、そんなことはないでしょう？」私はいい機会だと思って、すこし、老優から昔話を採集しよう、水を向けた。

「そりゃア竹野さん、私の若いころは、お茶屋に行って、

気に入った相手と呼ぶと、その芸者は、逢う役者の紋のついたかんざしをさして来たものだ。宮松のお母さんなんか、先代と一緒にいる前は、いつ時、帯にまで、うまく目立たないように崩した替紋^{かえもん}を模様^{かまも}に縫ったりしていたものだ」

「しかし、桜丸が大島航路とは愉快だね。誰だろう、その素^すっ頓狂^{とんきやう}な子は」と私は、つぶやいた。

「私もあまりおかしかったもので、その子が出て行ったあとで、新喜楽の女中さんに、名前を聞いておきました。染丸というひとでした」

宮松はおかしそうに、含み笑いをしながら、こう語った。

私は、その若い芸者に、一度会ってみたくなった。好奇心である。

(二)

その日は、夜の十一時まで、雅楽の家にいた。もともと、特別に用事があったわけではなかった。何となく顔を見たくって行ったのだが、宮松との話がはずんで、結局三人で、雅楽の好きな合鴨^{がぎ}の鍋を煮て、たのしく酒

を飲んだ。

食後に、弥助の色氣の話が、また蒸し返された。その時不意に、雅楽が、こんなことをいい出した。

「宮松のお父さんが、若いころに使っていた鏡台が、或る家の蔵にしまつてあるんだよ」

「はア？」宮松が不思議そうに反問する。

「竹野さんは知っているでしょう」

「いえ、そんなこと、伺つてません」

「そうだったかな」と雅楽が首をかしげた。「華族さんの奥方が、若いころの先代宮松のひいきでね、たしか宮松がはじめて勘平をした時だったと思う。私が定九郎だった。その忠臣蔵の初日に、立派な朱塗りの鏡台が届いた。じつにあでやかな色をして、形もよく、細工も凝っていた。私は、羨ましくてね、私には、そんなことをしてくれるひいきが、いなかったから」

「そんなことはありませんでしょう」と、宮松は微笑した。そして、私をチラッと見たので、私も隣りの若い役者を見返して、笑いながら、うなずいた。

「それはそうとして」と雅楽も苦笑しながら続けた。

「その鏡台を届けて来た子爵夫人が、幕間にやつて来て、先代にこういった。あなたが今まで使っていた鏡台を、

私に下さいって」

「ほう」

「もちろん、いなやはない。それまで宮松の楽屋にあった鏡台は桑で出来ていて、そんなに見すばらしいものでもなかったが、子爵夫人の所から来たのとくらべたら、問題にはならない。立派なのをありがたく頂戴して、今まで楽屋に置いていたのを、さしあげたわけだ」

「朱塗りの鏡台が、震災前まであったという話は、父からも聞いていますが、それが、そういう方から贈られたという話は、していませんでした」

「それは、そうかも知れない。その奥方とのあいだに、べつに何の噂も立たなかったのだが、子爵夫人が役者に鏡台を贈り、かわりに今まで使っていたものを受けとったということだけでも、あまり他人には知られたくなかったはずだろう。私は何もかも打ち明け合う友達だから知っていたのだが、ほかには誰も、宮松の楽屋の朱塗りの鏡台の由来を知っている者は、いなかったはずだ」

おもしろい話を聞いたと思って、私はホクホクした。

「第一、このことは、子爵様は多分御存じないと思う。つまり、包み隠さなければならぬ秘密だった」

「その桑の鏡台が、焼けずに残っているんですか」宮松

が質問した。

「お屋敷が麻布の一本松いっぽんまつにあつて、大正十二年の大震災にも、昭和二十年の空襲にも、焼けずに残った。そして、そのお屋敷の土蔵の中に、まだあるはずだ」

「奥方は、どうなさったんです」

「戦争中になくなられた。奇麗な方で、私も何回かお目にはかかったが、上品な、お姫様がそのまま片はずし（竹野注：中年の武家の女のカツラ）になったという感じの方だった。四国の大名のお嬢さんだと伺っていたが」と、雅楽がしみじみ話した。

私は、さっき聞いた花柳界の遊びの話にもまして、華族の夫人が役者をひいきにして、丹精して誂あぢえた朱塗りの鏡台を贈ったというの、この話に興味を持った。

美しい子爵の奥方が、勘平を初役で演じる二枚目に、そんなことをしたというのが、何とも、なまめかしく思われたのだ。

「その鏡台、見たいですね、家のは、震災と空襲で、みんな焼けてしまって、父の形見は何もありませんから」と、宮松は真剣な顔でいった。

「一度、私が調べてみよう。もちろん、その子爵の家も、今は華族ではないが、その奥方のお子さんが、大学の先

生をしているはずだ。野鳥の研究家で、有名な方だ」

私は、そういわれて、子爵家の苗字みょうじが何となくわかったような気がしたが、わざと黙っていた。

「おじさんから頼んで、そのお屋敷のお蔵にある鏡台をひと目だけでも、見せていただくわけには行かないでしょうか」と、宮松は熱心に、老優の顔を見つめながら、懇願した。

「伝手つてのないことはない。じつは、当主にあたる教授も、芝居が好きで、よく見に来て下さるらしい。もうその方の両親もいないことだから、ほんとの話をしても、お家騒動にもならないと思うが、まア一応、鏡台の交換については伏せておくことにして、何とかうまく、お願いしてみよう」

「そう願えると、ありがたいですね」

「宮松君」と雅楽は、急に改まった口調でいった。「もし万一その鏡台が、君に返されたとしたら、それを使うつもりかい？」

「もちろんですとも」と宮松は目を輝かしていった。「大切にに使わせてもらいます」

「しかし、そううまく行きますかね」私は、それは期待できないと内心考えたので、正直にそれを口に出した。

「当たってみなければ、わからない。だが、当主がわけ知りで、事情を察しながら何もいわずに、どうせしまつて置いても何にもならない品物だから、よかったら差し上げましょうと、いわないとも限らない」

「なるほど」

「私は、出来れば、その鏡台を宮松君に使わせたいと思う」と雅楽は急に熱中した表情になって続けた。「若き日の先代中島宮松が毎日その前で化粧をしていた。一世を風靡した花形の顔と姿を年中映していた鏡台には、その持ち主の華やかな芸のにおいが、浸みこんでいる。すこし大げさにいうと、二枚目の芸のたましいが、勘平のセリフじゃないが、鏡台とともに、この世にとどまっています、息子の宮松君に乗り移るかも知れない。その鏡台を楽屋に置いたら、もっといい弥助ができるようになるにきまっている」

私は、中村雅楽という人を、私たちよりもリアリストだと思っていた。以前に「奈落殺人事件」という短編に書いた劇場の地下室の事件の時に、殺された者のたたりといったものを江川刑事と私が感じた時、そんなことはないといって、明快に、二つにはずして凶器にしたハサミが、合わせてもとの通りにならなかった理由を、「ハ

サミが二挺あったんですよ」といったので、おどろいたのを、今も忘れずにいる。

芝居の世界の人にしては、つねに物事を現実的にのみ解釈する、珍しいタイプの老人だと思っていた雅楽が、いま若い宮松を激励するためとはいえ、超自然の芸のたましいなんて表現を持ち出したのが、いかにも突飛に思えたのだ。

しかし、一方で、その鏡台が私も見たかったし、父親の使っていた鏡台を楽屋に置くことで、今までになかった雰囲気が生じ、宮松に有効な刺激を与えられれば、どんなにいいことだろうと思った。

「どんな鏡台だったのですか」と宮松が尋ねた。

「さっきもいったように、桑で出来ていた。鏡はまんまるだったと思う。引出しのとっ手に、銀で花菱の紋が細工してあったと思う」

私は、雅楽の記憶のいいのに、あらためて感心した。

その夜、帰宅してから、すぐ床にはいったが、私は夢を見た。子爵夫人がニコリ笑って、「宮松さん、お返しするから、これを持っていらっしゃい」というと、きょう会った宮松が「ありがとう御座います」と頭をさげているけしきが見えたのだ。

おもしろいことに、その夫人は、細川ちか子そっくりだった。じつは、雅楽を訪ねる前の日に、劇団民芸で、細川ちか子の赤毛物の貴婦人を見ていたせいでもあろう。そんな夢を見たのも、私をはじめ聞いて聞いた鏡台にまつわる物語に、多分に昂奮していたのが、わかるのである。

(三)

いま私は演劇界のバック・ナンバーとスクラップ・ブックをかたわらに置いて書いているわけだが、「すしや」の出た次の月、京都南座の顔見世に行かない若手が、明治座で「忠臣蔵」を大序から七段目まで通して出し、宮松は千崎弥五郎をつとめている。

雅楽の鶴のひと声で、弟子の楽三が、四段目の「郷右衛門殿、郷右衛門殿」のセリフをいったのは、いうまでもない。

雅楽は、その次の春芝居の歌舞伎座で、久しぶりに出た「菅原」の二段目、道明寺の伯母御おばごの覚寿を演じて、みごとだった。おなじ時に、「車引」が出て、宮松がまた桜丸を演じたのが、おかしかった。

「たしか桜丸といった若い芸者に見せてやればいいの

に」と思ったが、そこまで世話を焼くのは、おせっかい過ぎるので、私は何もいわずにいた。

その正月にも、私用をかねて、雅楽の楽屋にも、千駄ガ谷の家にも、たびたび足を運んだが、十一月に聞いた子爵家の土蔵にある鏡台の話が、一向に出ない。

たまりかねて、きょうは、それとなく様子を訊いてみるつもりで、私は千秋楽近くの日曜日に、楽屋にもう一度行った。

すると、雅楽は、夜の部の二番目の「帯屋」の繁齋おとこしめまで大分時間があるので、横になって、男衆おとこしめに肩をもませていた。

「このままで失礼しますよ」

と挨拶する。

「どうぞ、どうぞ」

「時に竹野さん、宮松のこんどの桜丸は、見ちがえるように、いいと思いませんか」

「ええ、私もそう思いました」

「やはり、十一月の弥助のあとで、小言をいったのが、クスリになったと思いますよ」

「ほんとですね」

「これで、もうひとつ、花がほしい。こんどの桜丸では、